

佐藤淳展ギャラリートーク

平成 27 年 2 月 15 日 (日)
エイブル 2 階 交流プラザ

おはようございます。絵描きはしゃべらないで絵を見てもらったら良いと思っていたのですが。

今回はインドに限っての作品を並べました。床の間コーナーに 4 点展示していますのは葉書 60 枚位の大きさと、春の日展(日春展)に出品したものです。そして、こちらの会場に展示しているのは、写生や下図です。繰り返し草稿を重ね、吟味して制作に取り組みます。普通は、絵描きはこういうものは出さないんです。制作の手順など、どれも一つ一つ思い出のある作品です。

最初インドに誘われた時には、「嫌だ。暑い、貧しい、汚い、誰がそんな所に行くのか」と思っていました。しかし出向きましたら、日本で見聞きしていた事と全然違ったんですね。頭がひっくり返ったんですね。初めて自分を見つめたような気もしました。なんで自分は絵を描いてきたのかな、別に描かなくても生きていけるのになあとかですね。そういうしおらしく自分を見つめ直したのもインドでした。ほとんど一人で、あちこち行きました。

インド旅行の素晴らしさは、自分のスケジュールに無い出会いが次々とあることです。専属のガイドさんがインド音楽を聞きに行きませんかとか、インド舞踊、古典舞踊に誘ってくれたり、そういう出会いとか、いろいろ面白い国です。

12 月の 30 日、丁度インド洋の津波のあった前年に、関西空港からニューデリーに着いたら気温は 2 度。とにかく寒くて、ヒマヤラの下ですから雪が降っていました。その時は、コモリン岬というインドの最南端にある岬に、翌日の 31 日に飛んだのですが、そこは 35 度で、海水浴をやっているのですよ。日本でいうと北海道と沖縄というふうに、すごいですね。あちこち回りましたが、インドを知れば知る程わけが分からないようになるのです。それが魅力でもあります。

インドはお釈迦様の国だから一度は行ってみたいと思っていたのですが、仏教遺跡はアフガニスタンとかパキスタンの方ですね。世界遺産はじめ、お寺が凄いですね。インドをどこか一か所薦めてと言われたら、僕はアジャンターという洞窟寺院をお話したいですね。法隆寺の壁画は、アジャンターの釈迦の物語が描かれていますが、そのお手本と伝えられています。日本の木造のお寺と違って、石窟ですね。



絵①

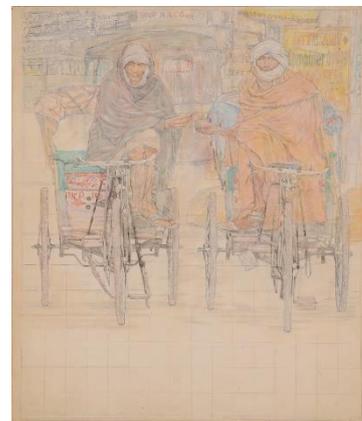
(ラクダの絵を指しながら)パキスタンとの国境にタール砂漠という広々したものがあるのですが、そこでラクダと水牛などの 3 万頭以上の売買があるのです、10 日間ほど。そこに行った時の絵です。(絵①) これは旅行者を乗せての帰りですね、だから、「晩帰」



絵②

と題名にしました。

(家族の絵を指して)これは私のインドのファミリーです。「明日、そちらに訪ねたい」と言って、いつもお世話になってます。この時も1000人ほど集まってくれました。日本人を見たことがない村です。もう何だか知らんけど、涙があふれ出てくる程、わぁっと寄って来てくれます。(絵②)



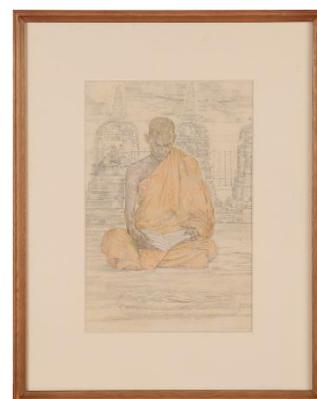
絵③



絵④

(人力車の絵を指して)これは力車、リキシャという日本語がインド語になっています。明治に入ってからですか、自転車力車、サイクル力車っていうやつ、三輪ミゼットみたいなオート力車、これらがインド全土の交通機関です。子供たちが学校に行く時とか、買い物にも、これが一番ですね。(絵③)

(祈りの絵を指して)これも僕が気に入ってる絵でしてね、葬式とかお参りの時、何気なく手を合わせていたのですが、人間の手の一番美しいのは合掌だと思います。美しいなと思って、地元のおばちゃんたちが毎日、お参りされるのですが、合掌というのは素晴らしいなと初めて思いました。(絵④)



絵⑤



絵⑥

(僧の絵を指して)これは若い僧侶が勉強してるんですかな。(絵⑤)これは道端で昼寝しているのですよ。(絵⑥)昼寝というか、そんな人が沢山います。この2点、僕が一番気に入ってる、好きな、自分でも好きなものです。

山奥に案内してもらった時に、知らない人にはベールを取ってくれない、最初、1時間から2時間、そのうち仲良しになってお家に来てっていう事で食事をご馳走になったと思いますけども。ベールを取ってくれたら、17歳のお母さんでした。これは日展にも出しましたね。(絵⑦)

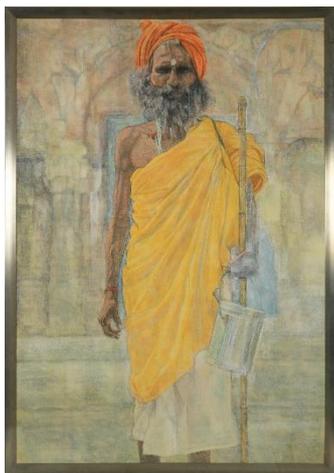


絵⑦



絵⑧

ここは、砂漠に行った時にこういう恰好して水汲みに見えるんですよ。子どもや女性の仕事のように。そのサリーがとても良いのですよ。ラクダ祭りの時のサリーもそうでしたけど。大都会の着飾ったサリーよりも、地元の部族の人とか木綿の安物の方が素敵です。(絵⑧)



絵⑨

床の間コーナーに掲げていますが、修行僧、苦行僧を描いたのがあって、そういった修行僧のお坊さんの事をサドゥーって言うんですね。濁点、てんてんを取ったらサトウになるんですよ(笑)。自画像と友は言います。(絵⑨)

2年前、沐浴の祭りに出向いたのですが、1月の中頃から2月の、ひと月位かな、ガンジス川、ヤムナー川、ものすごく広い所です。インドの四季は「暑い、寒い、雨降らない、降る」の4つの種類。雨季の時には橋も壊れる程の水ですけど、乾季の時は底が干上がります。そこに仮の設営をしますが、色々な人が来ていますね。サドゥーという修行僧の人たち、ご存知の方もいると思いますが、今から右手を上げますと言って、死ぬまで下ろさないとか、片足で立って、無言の行、一言もしゃべらないとか。その他も凄いのがあります。そういう修行僧との出会いがありました。

【質問1】

長い間インドに旅行なさってインドの絵を描かれてきたのですが、突然今回はもの言わぬ岩を選んだのは何故ですか？(平成26年度改組第1回日展で特選受賞した作品「界」は名護屋城跡の石垣を描いたもの)

【佐藤さん】

何処にでもある石垣を描いたら運良く、それが特選になったわけです。歳をとり、私も人間が出来てきてましてね(笑)、もの言わぬ岩と対話したかったんでしょう。5年余、唐津の名護屋城跡まで行きまして、何枚も何枚も写生して検討しました。

元々風景が好きでしてね、最近では一番難しかったのは渦の絵。私の画室の前に広がる渦に取り組んで、大きいのを2枚描いたんですけど、ものにならなくて、初めて日展に出品できませんでした。何か頭だけ先行するんですよ。何か賢くなったみたいに錯覚して哲学者みたいになるのです。だから手が出せなくなる。だから木とか道とか、油絵ではよく見かけますよね、道があって、奥行きがあって、電線があって、中継があって、民家があって、山があって、空があって、そういう風景ではなく、私の場合は、木を描きたいとか、石を描きたいとか。そのものに取り組みます。

石垣もそうですね。5年ほど通ってるうちに、モノクロで黒だけで書いたらどうかなあって思ったんです。それは、現地に足を運んだからだと思います。最初から今回は墨で書くぞって決めてはいなかった。写生を続けていくうちに、黒だけで描いたらどうかなと思ったのです。本紙は大きいですから、出品までは3カ月半かけて描きました。

私は、日本人が描くのは全部日本画だと思っています。油絵の具を使おうと、水墨であろうと全部日本画。そして、やっぱり日本画の中で一番大事というか、難しいのは風景だと思います。東洋の日本の自然の中に生きてる小っぼけな人間。だから風景画が心髄だと思いますね。

【質問2】

僕は洋画をしています、僕らはスケッチをしてデッサンをして、キャンバスにいきなり絵具をぶつけて描くんですけど、日本画家の方は多分スケッチされてから下絵を中下絵とか、それからもう少し大きくし

てから何枚か、3枚か4枚、下準備をされるのではないですか。ここに展示してあるのは、最初のデッサンですか。この大きさが一番下の絵なのですか？

[佐藤さん]

そうですね、それが多いかな。ただ、大きくても小さくても、吟味しないとね。いきなりは出来ませんから。だから一番大事なのは落書きをすること。葉書くらい小さくても良いし、眼と手の訓練をする事。それが一番大事ですね。

[質問3]

あなたはインドでテーマがほとんど人物なんですよ。去年画室で見せてもらったけれど、渦の絵を描いていたじゃないですか。あれから、この石垣、唐津の名護屋城ですよ。人物のこれだけのテーマから石垣の方へすーっと入っていく感覚が、何か柔らかいのかなあと思ったりしたんですけど、ご自分ではどうなんですか？

[佐藤さん]

黒白が原点、白黒じゃなくて、黒白。黒が原点。そしてこういうのを描くときに、真っ黒、真っ白、その中間をどう決めるかというのはやってみないと分からない。だから下図で検討するのですよ。

ここにおいている下図は、3Hで描いているのですよ。硬くて適格で精密というか、緻密な絵を描く場合は、薄くて硬いのが良いと思います。絵描きさんは、4Bとか6Bで描くと聞きますが。濃いのを描きたい場合は太鉛筆を使えば良いし、幅が広い刷毛で真っ黒く一気に塗れば良いし、こういう精細にやりたいたときは薄くて硬いのを使っています。

この絵は、貧しい人なんですけど、サリーのお店に行った時に、ドアボーイをしている中学生、若いお嬢ちゃんなんですけど、後ろにナチュラルフラワーの髪飾りが素敵でした。こういう人を描くときに、なんか優しそうな、悲しそうな絵を描くときに、繊細にやりたいなと思うんですね。

[質問4]

絵を描くときに一番先生が大切になさっているもの、日頃の生活の中での心構えであるとか、キャンパスに向かう時の心の持ち方であるとか、どういうものを大切にしてやられているのですか。

[佐藤さん]

大変難しいですね。

ちょっと外れますけど、絵描きは才能、個性…そんなものありません。訓練です。描いて描いて描きまくれば、その人らしいものが出てくるんだと思います。だから、40、50（歳）鼻垂れ小僧という名文句もあります。80、90になって自分の絵が描ける人もいるかなあ？って私のお師匠さんも仰ってましたけど。

だから訓練というか、一番きちんとやるのは、写生をする、検討をする、と色々練るわけですよ。小さな下図、小下絵、それから原寸大の下図を描くんですね。だから考えている時間が無いのです、もう作業なんです、本当に。

それから、絵の見方について、私は次のように思っています。「絵は好き好きで見ること」佐藤先生の

絵だから良かね、それではダメ。これ嫌い、これ大好きっていう風に好き勝手に観ること。田舎の飯田の中学の友たちが、「何しおっと？わりやお絵かきばかりして暇なんやなあ、俺たちがみかんの忙しか時に呑気やなあ」って。「今度の絵は良かばい」「何で？」って聞くと、「色の赤かけん」って（笑）。それが一番素晴らしいことです。構図がどうか、絵描きさんは分ったような分らん様な事を仰るがあれは困る。だから好き好きで御覧になったら良いと思います。

[質問 5]

インドって世界遺産の建物とか、風景としては、多分凄い物が沢山あると思うんですけど。その中で先生はインドに行って、どういう所に惹かれて人物を描かれているのですか。

[佐藤さん]

はい、風景も描いてますけどね。インドには絵を描くのが目的では行っていなかったのです。インドを訪ね、4～5年は何も描いていません。何かやっぱり、何か知らんけれどもインドの人は魅力があつてね。何でや？っていう人が多いのです。美しい女性との出会い。そして、いろんな人と接して、人間が好きになったのかなあ。

[質問 6]

さっきあなたが仰った事にぴんと来たんですが、単なる想像ですけれど、あなたの中では人物も風景のような感じがするのですよね。それで何時かも失礼な事を言ったかも分らんですけど、インドの美人の色香に惑わされて描かれたのはあんまり良くないかと（笑）。そういうものとか、さっきの修行僧とか、風景とか、人物じゃない世界に捉えようとされてるのかなあと思いました。それで石垣を描かれて、やっぱりこの世界かなあと思いました。

それから、今回の作品の石垣で、たまたまこの前、画室で小下絵を拝見しましたがけれども、一点一点を疎かにされていない感じがするのですよね。あれは、やっぱりもう常人じゃない（笑）。つい、まあ良いかって描いてしまうのですが、あなたにはそれが無い。そこらは本当に不思議な人だと思います。

[佐藤さん]

いやあ凄いことを。東洋日本の自然の中の風景の中の人物、人物からそういうものを感じてくださるなんて、ちょっと照れくさいような気がします。

[質問 7]

佐藤さんは学生の時は油絵だったと聞いたのですが、日本画に変わられた動機を教えてください。

[佐藤さん]

はい、佐賀大学を優秀な成績で卒業して（笑）、訳分からんようになって、京都に上ったのです。京都に行ってから私の師匠との出会いがありまして、やっぱり師匠との出会いが一番大きいと思います。

京都は日本画家だらけですね。今でも、京都のプロの画家協会には 700 人以上いるんです。京都は凄い人数というか。そういう日本画に接したという事でしょうかね。

【質問8】

佐藤さんは、岡山県の牛窓町という所でも絵の勉強をされたと伺いましたが、そこら辺をもう少しお聞かせ願いますか？

【佐藤さん】

一番最初に画塾の写生が岡山県の牛窓という所でありまして、そこに行ったんです。そしたら、そこに油絵の凄い先生がいらしたんです。日展の顧問もなさった佐竹徳次郎先生で、その先生との出会いがあったのです。そこに15年通いました。小豆島にはオリーブの木がいっぱいあるのですが、そのオリーブ畑の中の三畳一間の小屋に先生はお住まいでした。そして、夏は朝5時、冬は6時くらいから、20分程かけて、オリーブの畑に行かれるのです。そこで40数年描いておられる。畑に何箇所か、画架、三脚たちが立っていて、そこで写生なさるのです。

私が訪ねるのを物凄く喜んでくださって、岡田三郎助先生にもお世話になったということで、僕が訪ねたら本当に佐賀の話「佐賀の絵描きさんはお侍ですな」キュッて、お髭をこうしたりして、そういう楽しいお話を何時もなさっていました。僕がオリーブの下を歩いてきてる時に、誰かなんか呼んでるなあと思ったら、もう90過ぎのお爺さんですから、「佐藤さあ〜ん」と甲高い声で呼んで、コーヒータイムの合図ですね。物凄く可愛がっていただきました。100歳まで畑に立って、「アトリエは何処でしょうか？」「アトリエ？そんなもん、有りますか？」と言って、畑を指差しておられました。そして100歳まで写生なさって、101歳の時に亡くなりました。「佐藤さん、時間かかり過ぎてねこの木は。キャンパスに入らない様に伸びてしまっている」って。物凄く楽しい時間でした。

【質問9】

佐藤先生の描いていらっしゃるお姿を想像したいのですが、女性だと、買い物とか炊事とかで途中で諦める事もありますけれども、先生は没頭されると飲まず食わずで何時間も描かれるのですか。また、休憩されてからの切り替えはどのようにされていますか？

【佐藤さん】

絵を描いてる時には、1日10時間くらい絵の前に座っているのですよ。筆を入れるのは1~2時間、ずっと眺めている訳です。それで最後の10日間は磨きを掛けろって教えた頂いたので、そういう時もありますし、集荷のトラック業者さんが来てくださる時がこれで終わりという時もあります。もう何時ストップして良いか分らんわけですよ。集荷の時が終わってやっと正月が来るわけですよ。あんまり時間も上手に使ってないですね。女性を描く時には好きになった方が良いでしょうから(笑)。答えになりましたかどうか分かりませんが。

【質問10】

絵を描く時、一緒のものを描きたいけれども、どんどん樹が成長していくというように対象は段々変化していきませんが、先生はどういう風にまとめていかれるのですか。風景とか人物画を描いておられますけれど、最終的にこのような形に結び付けるというのは「記憶」なのでしょうか？

[佐藤さん]

いろいろ検討したり、写真見たり、困るのはインドまでモデルさん描こうって、そうそう行けないでしょ。だから写真とかも参考にするんですけど、写真では絵は描けません。たくさん描いてるうちになんとか、こういう風に仕上げようというようになるのかな。先ほど申しましたお師匠さんとの写生旅行は苦痛でした。ご馳走が出るでしょ、全品写生なさるんですね、それまでお預けなんです。だから年間背丈の倍くらいは描いてありました。描くしかないということですね。

インドの地図を用意してくださったのに、インドの話があまりできず反省です。日本画とインドの2つのタイトルは無理でした。そして、100名余の方がギャラリートークに参加くださり、いろいろな人に何をしゃべったらよいか戸惑いました。日頃、絵に関わりのない方、絵を描いている人など様々でしたから。また、鹿島の若い人に日本画に親しんでほしいと思いました。

ありがとうございました。



ギャラリートーク風景



床の間コーナー 展示風景



交流プラザ 展示風景